



大本山永平寺



龍門

新春を迎えました。皆さまにとって善き一年であることを謹んで祈念申し上げます。

「魚、龍と化す」という言葉をご存知でしょうか？

海底に「龍門」と言われる場所があり、そこを通過した魚は必ず龍になるのです。いささか昔話のようですが、実は永平寺に「龍門」は現存します。

雛僧が其処を通過し俊厳な修行を勤め励むことによって、道元禅師さま門下の禅僧となっていくのです。

歴代の仏祖さま方が皆聡明であり頑強な体躯に恵まれていた訳ではありません。共通することは「不動の志」をお持ちであったということです。

微塵の妥協も介入させず、修行すると決めたならば成すのみであります。

今月は一月ならではの特別な行持があり、粗相の無いように事前に猛稽古を勤め臨みます。

「大般若」という法要を勤め和平、復興を祈願いたします。

深山幽谷の白き正月にお参りいただき、共ども彼の地へ祈りを捧げていただければと思います。



大本山總持寺



御移転一〇二年目の幕開け

大本山總持寺の新年を迎える行持は、関東一大きいといわれ、二十トン近くある大梵鐘だいぼんしょうの除夜の鐘の音で始まります。読経の後、導師が鐘を一声撞き初めると、僧侶たちはすぐさま行列を作り、錫杖しやくじょう、法螺貝ほらかいを先頭に向唐門むかからもんに向かいます。行列の後には初詣の人びとの長い列が続きます。門の前で立ち止まった行列の中から、維那和尚いのおしょうが「かいもーん」とひとときわ大きな声を張り上げると、普段閉まっている大きく重い門の扉が、左右同時にゆっくりと開きます。このときおよそ午前零時となり、まさに新年の扉が開かれる瞬間を迎えるのです。

その後、行列は仏殿に入り、ここで新年を祝う祝祷諷経しゆくとうふうぎんが行われます。諷経が終わると、すぐに大祖堂で、禪師さま御親修ごしんしゆにて元朝大祈祷が行われ、世の中の平和と人びとの心の安寧をお祈りいたします。初詣祈祷は大祖堂の他に、三宝殿さんぼうでん、大黒尊天前、大駐車場で行われます。三が日の間、祈祷太鼓の躍動的なリズムが山内各所に響き渡り、例年二十万人を超える多くの参拝者が本山に訪れます。昨年御移転百年を迎えた本山は、さらなる発展と、震災復興を願い、檀信徒とともに、今年新たな一步を踏み出すこととなります。

曹洞俳壇

選・村松五灰子

焼失の堂の瓦礫や彼岸花

愛知県 松井 曉美

評 心の拠り所である大切なお堂が焼けてしまった。

その無残な瓦礫の傍に、切ないまでに約束の如く昨年同様彼岸花は真っ赤に咲くのである。多くを語らないこの一句をもつて作者の心情を吐露している。

聞くやさくて寄り道したき走り蕎麦

岩手県 鈴木 道昭

評 あの新蕎麦の香りや歯ごたえ喉越しを思うと、大の蕎麦好きとしては、もう落ち着かない。当然寄り道をしたであろう作者の「聞くやさくて」の表現に味。

◆障子貼る喧嘩する程仲良くて 岩手県 上沖 貞子

◆墨を擦る手を止む木の実時雨かな 神奈川県 柳原あきとし

◆深読みのできぬ性格とろろ汁 東京都 藤橋 眞子

◆「海ゆかば」低く流れて秋彼岸 静岡県 村松 保子

◆胴乱の根付に苦心いなびかり 秋田県 鈴木ゆう女

◆老ふたり昭和香に濁り酒 神奈川県 小野沢邦彦

◆清貧といふ静けさや秋の風 北海道 石森美恵子

◆ポスト迄芙蓉に酔の兆しかな 千葉県 鈴木 英子

◆空蟬の爪立てしまま魂何処 三重県 山下 利夫

◆目玉焼作つてゐる子良夜かな 千葉県 吉田 ツル

*選者吟

買初の一升瓶と助六

五灰子

*作句小見

あけましておめでとうございます。

初笑心天地に遊ばせて 柏翠

我が師の句。かくありたいと思っています。

本年も皆様の御投句お待ちしております。

曹洞歌壇

選・長澤 ちづ

けふ月曜うん月曜だよ老いどちの確かめあ
ひつつけふが始まる

東京都 石場くに子

評 老人施設でのある日の会話だと思ふ。みんなで励ましあつて一日一日送る様子が伝わって来る。「けふ」の繰り返しが明日につながるがゆゑ。リフレインが効いている。

一人旅は淋しからむと共に行きし旅の写真
を棺に入れやる

長野県 中野田糸子

評 初句の「一人旅」は、生前の旅とこれから赴く黄泉への旅と両方にかかっている。幽明境を異にした今、亡き人にしてあげられる最上のことをしてしようとする作者、そのひた向きな愛情が濃やかである。

◆波殺し屏風に石尊掻く作業大方老いし村の海女どち

秋田県 小田篤恭葉

◆図書館の坂下りくるおさげ髪籠に大判の画集はみでる

三重県 野呂 と志

◆ひむがしの空に朝光をあびながら猪の犬群駈けて
ゆくなり

福岡県 三吉 誠

◆屋根みればまだ陽はあれど家族らが夕餉まつかと歎を
おきたり

静岡県 岡田 時枝

◆墓参り終えたる後のすがすがし金木犀の香り漂う

広島県 日松 弘

◆亡き母への思いはつきず手の傷にめぐりて走る四十年前

福岡県 清水 博行

◆彼岸会に亡き母の所作思ひつつかおはぎの小豆を時かけて

千葉県 熱田美代子

煮る
◆もの悲しきリズムを奏で降る雨に心をあずけ思いに

兵庫県 河本佐知代

◆早池峰のお山をおそれかしこみて遠野の村里秋神楽奉ず

福岡県 小林 栄行

◆ありなしの風に散り敷く白萩を「ご飯ですよ」曾孫の
ままこと

山形県 多田 さよ

*選者詠

りんどうのつぼみなす段のぼりつつなかなか
本音は聞けぬものなり

ちづ

*作歌小見

短歌というたった三十一音しかない小さな器に思いを盛るとき、具体的な何かがあると読者のイメージを一気に膨らますことが出来る。石場さんの「月曜」であり、中野田さんの「写真」である。拙歌の場合、上句の場面かもしれない。